

『進路相談』 作…ポチ子

夕方の教室。先生が教室の入ると、一人残る生徒を見つ
ける。

先生 「なんだ、まだいたのか。もう下校の時間だぞ、早く帰りな

さい。」

生徒 「えー、家だと集中できないから、もう少し残っちゃダメ？」

先生 「あ？勉強か？感心はするが、下校時間は守らないとな。家
がダメなら、図書館にでも行って勉強したらどうだ？静か
だし、集中もできるだろう。」

生徒 「はい。」

生徒、机を片付け始める。

生徒 「ねえ、先生。」

先生 「ん？」

生徒 「私が大学に受かったら、その代わりに誰か落ちちゃうのか
な。」

先生 「急にどうしたんだ？・・・まあ、定員というのがあるから

なあ。でも、別に君が受かったせいで落ちたってことにはならないよ。」

生徒 「そうかな……。最近、勉強していて思うの。仮に私が受

かったら、落ちる人もいて。その人もその人なりに努力したはずでしょ？でも、それは報われないわけじゃん。私のせいで。そうしたら、私の幸せは誰かの不幸の上に成り立ってるんじゃないかって。」

先生 「……受験勉強で疲れてるんじゃないか？そんなこと考

える必要はない。たまには家でゆっくり休むのも良いことだぞ？」

生徒 「だって、先生。よく言われない？世の中にはご飯を食べ

れない子もいるんだから、ご飯は残さず食べなさいとか、今日を生きられなかった人もいるんだから、全力で生きなさいとか。でも、もし、世界の幸せの数量が決まっていたとしたら？私が幸せであることが、誰かの不幸になっていくなら？そうしたら、私の生きている意味ってなんだろう。」

先生 「やっぱり、受験勉強続きで、疲れているんだよ。君のよう

な年齢だと、そうやって思い悩んでしまうこともあるものさ。判定だと余裕で合格の範囲内だろ？そんなに追い詰める必要はない。今日は家でゆっくり休みなさい。」

生徒、先生沈黙。

生徒 「うん、分かった。」

先生 「ほら、もう校門しまるぞ。気を付けて帰れよ。」

生徒 「先生、さようなら。」

先生 「おう、また明日な」

— 終わり —